ちょっとそこまで
～お散歩日和（名言編）～

雨に濡れてた　たそがれの街
あなたと逢った　初めての夜
ふたりの肩に　銀色の雨
あなたの唇　濡れていたっけ

数年前、草刈正雄が主演している、広尾近くの納骨堂のＣＭがテレビに繰り返し流れていました。しかし、注目したのはそのＢＧＭの方です。ご存知の方は少ないかもしれませんが、「黄昏のビギン」です。「上を向いて歩こう」の永六輔・中村八大コンビの作品ですが、実際には中村八大による作詞作曲だとか。何とも言えない味わいがＣＭ自体の格調を高めています。非常にうまい演出です。

もともとは水原弘の歌ですが、有名になったのはちあきなおみのカバー曲からでした。そう言えば、ちあきなおみは今どうしているのでしょう。彼女に関しての一番の思い出は、学生時代に見ていた紅白歌合戦です。この年は「ハイファイ・セット」が初登場だったこともあって下宿で一人寂しく見ていたのです。その時彼女が歌ったのが「夜を急ぐ人」という何ともおどろおどろしい曲。紅白のお祭り気分が一変しました。それまでの傍観者的な視聴者意識が吹っ飛んで、「なんだこりゃあ。」みたいな、「こういうのもありなのか」みたいな、形容しがたい気分を味わいました。それまで持っていた演歌歌手のイメージが完全に引っくり返され、彼女の歌唱力の凄さをまざまざと意識したのでした。

ついでに触れると、彼女の歌で絶対に忘れてはいけないのが「ねえ、あんた」という一人語り歌でしょう。幸薄い、それでいて可憐な面を失わない女性を演じる姿は涙ながらには聞けません。最近の、早口で自己主張を一気にまくしたてる歌や、じっくりという言葉がもはや死語になったのではないかと錯覚するほどに入れ替わり立ち代わり踊る歌が席巻している時代に、こういう情感あふれる曲は余計に心に沁みてきます。

今の時代、そういう歌を聞かせてくれる歌手は、中島みゆきだけになってしまったような気がします。最近よく聞く、ＢＯＳＳ缶コーヒーのＣＭバックに流れる「ヘッドライト～」やドラマ「ＰＩＣＵ」の主題歌「倶（とも）に」、新作映画「Dr. コトー」主題歌の「銀の龍の背に乗って」を聞いていて、ますますその思いが募ります。

話を「黄昏のビギン」に戻します。「黄昏」と書いて「たそがれ」と読むのはどうしてなのか、気になります。もちろん当て字で、正しくは「こうこん」と読みます。「たそがれ」自体の語源は、夕方に薄暗くなった際に人の顔が見分けにくくなり、「誰だあれは」という意味で「誰そ彼（たそかれ）」からきています。

ではなぜ「黄昏」を当て字したのかということですが、「昏」は「日」と「氏」を組み合わせた会意文字です。「氏」は肉を切る小刀の形。氏族共餐の時、これで肉を切り分けるので、のち氏族の意に用いました。「日」の形の部分はおそらく肉塊の象形でしょう。氏族同士の結合（婚礼）など重要な儀礼や祭祀は、日暮れ時に行われたことから「昏」は「日暮れ」の意味になっていったと考えられます。「婚」は「女＋昏」なので、「人生の夕暮れ」の意味かと思って一人爆笑したのですが、どうもそうではなくて、単に祝

宴が夕暮れ時に開かれたからだそうです。

「黄」には色の黄色のほかに「黄金」の意味がありますので、日暮れを表す「昏」に「黄」を加えることで抒情的な効果を狙ったのかもしれません。

ここで、触れておきたいのは、映画の世界でこの時間帯のことを「ゴールデン・タイム」「ゴールデン・アワー」と称することです。発想が似ているではありませんか。ついでに言うと、「マジック・タイム」「マジック・アワー」とも言います。こっちの方が主流かな。いずれにしても、日没前または日の出後に数十分程体験できる薄明の時間帯を指す撮影用語で、光源となる太陽からの光線が日中より赤く、淡い状態となり、色相がソフトで暖かく、金色に輝いて見える状態になることに由来しています。

三谷幸喜の作品に、そのままをタイトルにした「マジック・アワー」という傑作があります。誰にでも訪れるだろう「人生で最も輝く瞬間」をテーマにした喜劇作品です。とても面白いのでご視聴ください。そう言えば、「ラ・ラ・ランド」にも「マジック・アワー」が効果的なシーンで使われていました。こちらの映画も見どころ満載ですが、何と言っても冒頭５分間は長回しの逸品となりました。ここだけでも必見です。主演のエマ・ストーンは、ディズニー映画「クルエラ」も演じていて、芸の幅が広いなあと感心しました。

脱線ついでに言うと、私が大学で映画を学んでいた頃、「アメリカの夜」というトリュフォーの作品を巡って、自分たちでも実践してみようということになりました。この「アメリカの夜」というのは、映画用語の中でも特殊な隠語で、「昼間に撮影した場面を夜間の場面のように見せる映画の技法」のことです。大体は予算の都合上、夜間に撮影することが難しい場合に用いられます。しかし、最近の映画で言えば、「マッド・マックス～怒りのデスロード～」では、一味違った使い方をしていたので、演出法としてはまだ可能性があるようです。

話を戻します。どうせやるんだったら、真昼に撮影するのではなくて、マジック・アワーに挑戦しようという暴挙に出ました。これは、街を走る自動車のヘッドライト、街灯、部屋の明かりが点き始める関係で、あたかも夜であるのように見える効果がより一層増すだろうと目論んでのことでした。学生にありがちなことです。経験不足で理屈ばかりが先行していますから当然の結果になりました。このマジック・アワーというのは、ほんの一瞬の時間帯であり、しかも、光の状態が目まぐるしく変化する関係で、余計な編集の手間が増えただけの、見るに堪えない作品で終わってしまいました。しかし、その後、おかげさまで、この手法を取り入れた映画に出会うと、目が覚める思いをすることになりました。制作人への多大なリスペクトを感じるようになったからです。

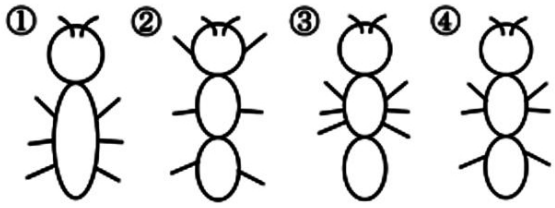
映画「カミュ～」より

この時の映画制作ゼミのエピソードを綴った作品が、当時の指導教官であった柳町光男監督の「カミュなんて知らない」です。ここでは、映画を学ぶ学生たちの姿（自慢ではありませんが、モデルは私たちです。）を描きながらも、映画人へのオマージュに満ちています。例えば、冒頭シーンは映画「プレイヤー」と全く同じ展開で、設定だけを立教大学キャンパスに移しての長回しで撮影されています。当初は早稲田大学文学部キャンパスを想定して脚本ができていたのですが、「スーパーフリー事件」が起きて大学側が許可しませんでした。悔しかった思いは今も引きずっています。また、教授役の本多博太郎が顔を白塗するシーンは、映画「ベニスに死す」へのオマージュで、そのことを知らないとただ単に悪趣味な演出としか思えません。

「長回し」については、その後登場した「カメラを止めるな」や「１９４１」は、度肝を抜かれたというのが正直な感想です。「ここまでやるのか。」という、映画人の矜持さえ感じました。

今回の名言編は、名言でも何でもなく、筆者の好みである歌と映画の紹介に終始してしまいました。たまにはこういう息抜きも許してください。どうもすみませんでした。（終）

ちょっとそこまで
～お散歩日和（自然編）～

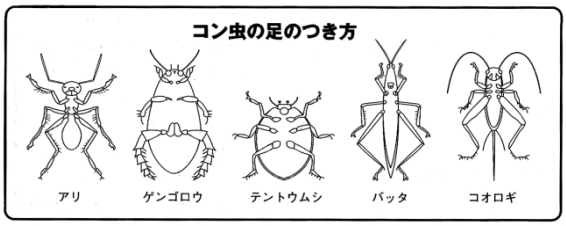


冬になると、昆虫たちが姿を消してしまいます。当たり前と言ってしまえばそうですが、もう少し謙虚な気持ちになって、昆虫の冬越しについて考えてみたいと思います。

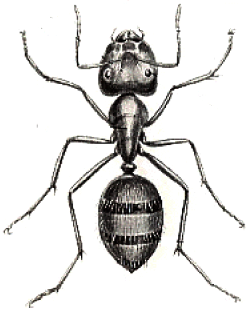
その前に、以前どこかの中学入試問題で、アリの絵を描く課題が出た記憶があります。上手に描くことが要求されているのではなく、昆虫の体のつくりをきちんと理解しているかどうかが問われた問題でした。さて、読者の皆さんは描けるでしょうか。

ということで、右上の図を見てください。どれが正解だと思いますか。回答者の半数以上が不正解なので、安心して間違ってください。昆虫については、小学校３年生で学習します。このときに押さえる定義は次の２点となっています。

① 体が、頭・胸・腹の３つに分かれている。
② 胸に足が６本ついている。



胸から６本の足が出ているのが大きな特徴ですので、この点をしっかりと把握できているかが分岐点ということになりそうです。正解は③です。恐らくこの中学では、じっくり観察できる子を入学させたいと望んでいるのでしょう。



少し話は逸れますが、最近の中学入試問題を見ていますと、観察や実験などの体験から得られる学習をちゃんとやってきたかどうかを問う問題がとても多くなりました。目先の賢さは要求されていないのです。

昆虫の定義を知った子供たちは、並行して「たまご→幼虫→さなぎ→成虫」という成長過程も学んでいきます。多くの学校で行われるのがモンシロチョウとカイコの飼育です。どちらもとても簡単で、その変化が分かりやすいからです。

ここからが本題です。さて、昆虫はどうやって冬越しをしているのでしょうか。多くの人はどれも卵で冬越しをしているのだろうと安直に思っているようですが、それほど単純でもありません。

その昔、「**バカたまご　トカセ幼虫　チョウさなぎ　ハチアリテントウ　親で冬越し**」で、冬越しの姿を区別して覚えていました。覚えたからどうということもないのですが、観察眼は養えました。

〇バカたまご：　バッタ・カマキリは、卵で冬越しをします。

〇トカセ幼虫：　トンボ・カブトムシ・セミは、幼虫で冬越しをします。

〇チョウさなぎ：　チョウは、さなぎで冬越しをします。

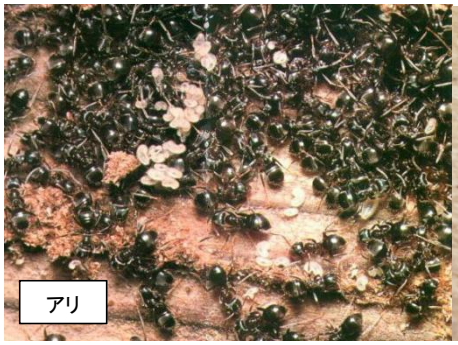
〇ハチアリテントウ　親で冬越し：　ハチ・アリ・テントウムシは、成虫で冬越しをします。

◆卵で冬越しをする昆虫

◆幼虫で冬越しをする昆虫

◆さなぎ（まゆ）で冬越しをする昆虫

◆成虫で冬越しをする昆虫

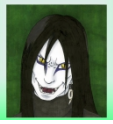
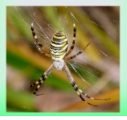
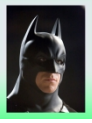
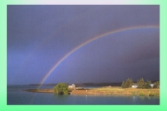


このように類型化しましたが、実態はそれほど簡単ではなく、種類によって例外が随所に見られます。まさに多様性の世界です。ただ、こういう知識があると、冬の散歩道も思わぬ発見があって楽しいものです。

最後に、前号の「足偏の漢字」に続いて、今号では「虫編の漢字」を列記してみます。

虻蝦蜻蛉蚊蜘蛛蛾蟹蛙蛞蝓蝸牛蝙蝠蜥蜴浅蚓蝗蛎蚯蚓蟻蛍蜻蛉蚕蛇嘱蟷螂螻蛄蠍燭触牡蠣蟋蟀蝕蠻蝉掻騒属濁蛸蛋蜘蝶独虹蚤蝿蛤螟螢蝪蝣蝙蝮蝨蝗蝴蝎蝌蝸蝟蝠蝮蜥蜻蜷蜿蜴蚓蛹蜍蜉蜑蛻蜃蜀蜈蜆蛯蛛蛟蛬蛋蛞蛔蛇蠣蛉蚰蛆蛄蚯蚶蛙蛸蛇蛍蚣蚓虱繦禹矚癇獨櫁屬囑嗤蝋嵐螺融蜜繭蛮蛭楓風蜂蠹蠹蠶蠱蠡蠑蟒蟒蟷蟶蟾蠍蠏蟠蟲蟯螻蟆蟇螳蟄螫雖蟐蟀螽蟋螯螂

こうして並べてみても、悪趣味なだけで何の工夫もありません。そこで、気になる文字を挙げてみます。さて、いくつ読めますか？

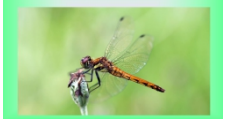
蝮	マムシ	蛇	ヘビ 	王蟲	オーム
蛸	タコ	蝦	エビ	蟹	カニ
蛙	カエル	蛤	ハマグリ	蜆	シジミ
蚯蚓	ミミズ	蜘蛛	クモ 	蝸牛	カタツムリ
蜥蜴	トカゲ	蛞蝓	ナメクジ	蝙蝠	コウモリ 
蠍	サソリ	虹	ニジ 	風	カゼ

何をお伝えしたいのか、お分かりになりますか。そうです。いずれも昆虫ではありません。いえ、そもそも虫とは到底呼べないものばかりです。「虹」や「風」に至っては、どうして「虫」が付いているのかさえ想像し難いものがあります。この理由は「虫」の起源が「マムシ」にあるからです。昔の人はどうも、蛇のような爬虫類をひとまとめにして虫と呼んでいたようです。または、人でもけものでも鳥でも魚でもないものを全部十把一絡げに虫の仲間にしてしまっていたようです。

一方、もともとの昆虫の方には「蟲」が使われていました。こちらの方が、うじゃうじゃいる感じがします。「蠢く」との関係づけで見ると面白味が増すというものです。

ちなみに、「虹」はその昔、巨大な蛇または龍が創り出していると考えられていました。同様に、「風」も「帆」を意味する「凡」と「虫」、つまり「風を起こす竜神」が合わさってできています。「虫」に代わって「鳥」と合わさったのが「鳳」ということになります。ここには書き出していませんが、「蜃気楼」も、「蜃」とは巨大なハマグリのことで、これが気を吐いて描いた楼閣だと考えられていたことが語源です。

最後に、昆虫の漢字を列記しますが、余りにも難解過ぎて、書くのも読むのも怪しくなってきました。

蜻蛉	トンボ 	蟷螂	カマキリ	蟋蟀	コオロギ

（終）

ちょっとそこまで
～お散歩日和（植物編）～

９号棟南の「夏の雲公園つばき園」に早咲きのツバキが咲き始めました。ここが生まれた経緯については、次のサイトに、「椿園の成り立ち」と題して詳しく触れられているので参照なさってみてください。

https://tsubaki-fan.com/camellia-trip/hikarigaoka-natunokuko-park-tsubakien/

肝要な部分のみ引用します。

花とみどりの相談所内の資料には椿園の目録があり「横山三郎名誉会長邸より、１００種１００株を移された」と書かれていたそうです。目録贈呈の日付は１９８８年６月６日。どのような経緯か詳細は不明とのことでした。

この椿園について詳しく知るＳ氏からもお話を伺うことができ、横山氏は練馬に住んでいたことがあり、光が丘が作られる当時、町づくりのためにとご自分の椿コレクションの寄贈を申し出られたことが分かりました。１９８６年～８７年頃のことではないかということです。

日本ツバキ協会の記録によると、１９８８年４月１６日、１７日で第１回練馬光が丘ツバキ展が開催されています。横山氏寄贈によって椿園ができたとすれば、それをきっかけにツバキ展が始まったと考えて時期も合います。

横山三郎氏とは、「日本の椿花 園芸品種１０００」などの著書があり、長く日本ツバキ協会で会長を務められてきた方です。このツバキ園は、設立当初は１００種１００株の園芸品種で発足したそうですが、枯れるなどの事情でしょう、現在は８０数種に減っているようです。とても貴重な品種がここまでたくさん植栽されている場所は大変珍しく貴重です。隣接する団地に住んでいながら何も知らないではもったいないと思います。少しでも関心を寄せていただければと願っています。そこで、花の見頃は３月ですので、その時期に向けてこれから折を見て開花した花の様子を紹介していくことにします。現在のところ、次の４種類の品種が咲いていました。

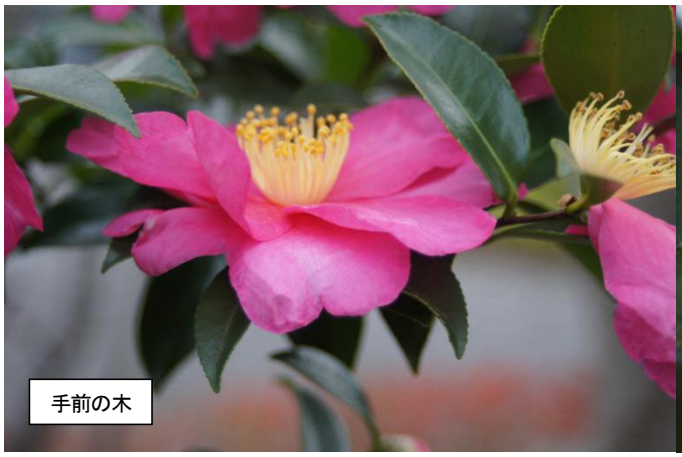
この他サザンカもたくさん咲いていましたが、気になったのはその木の表示にあったツバキの品種名が消されてサザンカの表示札にかけ直されていたことです。これは、元のツバキが枯れて植え替えたからでしょうか。しかし、もしも植え替えるだけなら同じツバキを植えるはずです。想像するに、品種名を間違っていたので修正したのではないでしょうか。それほど、サザンカとツバキの区別は専門家でも難しいからです。大まかな識別法は、当団地ホームページ「花便り」にて紹介していますのでご参照いただければ幸いです。

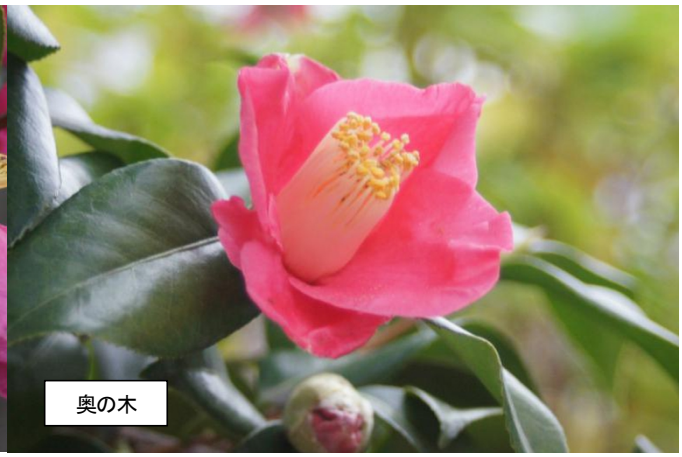
https://ichou-douri.com/WordPress/wp-content/uploads/icho-tsushin/plant/pl_sazanka.html

ところで、そのサザンカとツバキについてですが、集会室前にとても気になっている植栽があります。

写真では分かりづらいのですが、集会室の入り口に向かってすぐ左側に赤い花を咲かせる、２本の木が並んで植えられています。ちょっと目には同じ種類の花に見えるのですが、じっくりと観察すると、どうも素人目にも手前と奥とでは花の姿に違いがあることに気付きます。

この２つを並べてみることにします。





さらに、その木の根元を見てみました。

ここまで顕著だとほぼ確信に近くなってきました。つまり、手前の木はサザンカで、奥の木はツバキだということです。

まず、花の咲き方に特徴があるからです。サザンカの多くは完全に平開して咲くのに対して、ツバキの花は、平たく開いて咲くことはほとんどなく、カップ状になることが多いという違いがあります。

次に、その散り方です。これもよく知られていることですが、ツバキの花は、そっくり丸ごとポトリと落ちるのに対し、サザンカの花は花弁がバラバラになってそれぞれ散っていくからです。

もちろん、いずれも例外があるので断定はできませんが、じつはそのことよりも、こんなに近くに違った品種の木を並べて植栽していることに少々驚いた次第です。どうせなら色違いにすれば良いのにと思うからです。

ちなみに、右の写真は８号棟西のサザンカの生垣です。（終）

ちょっとそこまで
～お散歩日和（地域編）～

せっかくこれまで愛染院について触れてきたので、もう少しお付き合いください。今回は、その境外施設である「田柄不動尊」です。

ここに祀られているのは、その名の通り、不動明王です。

そして、その両脇侍には、矜羯羅童子（こんがらどうじ：向かって右）と制吒迦童子（せいたかどうじ：向かって左）を従えた、不動三尊像となっています。矜羯羅童子は童顔で、一心に合掌している姿に表され、制吒迦童子は対照的に、金剛棒を手にした悪戯小僧のように表現されています。その位置が通常よく見る三尊像の逆になっている点が面白いと思います。

その不動明王ですが、サンスクリット語で「アチヤラナータ」と言い、「動かざる守護者」を意味することから、「不動」の漢字が当てられました。

燃えさかる火焔光背を背負っていますが、これについては、少し解説が必要です。

仏教では四相と言って、「生・住・異・滅」の４つの段階を経て世界は消滅するとも説かれています。そのとき世界を焼き尽くす火を「劫火（ごうか）」と呼び、不動明王が背負う炎こそ、その劫火だと言われています。つまり、不動明王から生じる火が一切の煩悩を焼き尽くすことを象徴しています。

また、右手に宝剣を、左手には羂索（けんさく：５色の意図を撚り合わせた救済仏具）を握りしめ、恐ろしい顔（憤怒相）で睨みをきかせています。これは、さまざまな欲望に惑わされる人々の迷いを剣で断ち切り、欲の海に溺れる人々をロープで引き上げてくれる頼りになる仏であるとの意味です。また、怖い顔も、親が子を叱るのと同じで、人々に対する愛情がその内側に秘められていることを表しています。

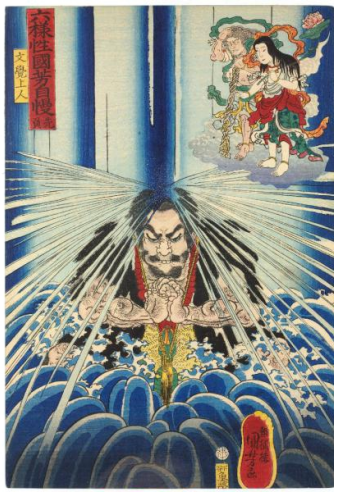
少し見づらいのですが、髪型が少し特殊で、「弁髪（おさげ髪）」を結っています。頭髪を束ねて左側に“おさげ”のように垂らしているスタイルには意味があります。

まず、頭上には蓮華（頂蓮）を載せていることから、頭の上は「仏界」を、左側に垂らした髪の先は、私達の「衆生界」を表しています。このことから、常に不動明王は人々の救済のために注意を向けていることを意味しています。

また、髪を束ねているのは、一刻も早く救済活動のための行動が起こせるよう、髪が邪魔にならないことを表しています。

これらは不動明王独特のもので、逆にこれが目印になるとも言えるでしょう。約束事に縛られた他の仏像と違い、不動明王は架空のキャラクターですので、仏師の遊び心満載で、そこもまた魅力

なのです。不動明王巡りをすると、その個性に改めて気付かれるはずです。



ついでに触れておくと、不動明王信仰が人々の間に広がったきっかけは、元寇だと言われています。国家最大の危機に際し、さまざまな加持祈祷が行なわれましたが、とくに効果があったのが不動明王の修法で、みごとに元を退散させることができたというのです。

また、「平家物語」での、頼朝に挙兵を促した文覚上人の那智の修行の下りなどは、人々に霊験あらたかな思いを募らせるのに十分だったはずです。

本尊の不動明王の話に偏ってしまいました。

もともとこの不動堂は、田柄地域の村役人であった相原家の墓地であり、阿弥陀仏を祀るお堂でした。恐らく相続税対策なのでしょう、愛染院に管理が移って現在に至っています。したがって、前ページの本堂内の写真をよく見ると、不動明王の向かって左側には阿弥陀仏が鎮座しています。

裏手は今でも墓地が残っており、その中に、一族の長である「相原源左衛門」の銘が刻まれた墓碑もあります。

彼については、練馬区教育委員会が発行する「練馬区を開いた人々」に掲載されていますが、簡単に言うと、明治２年、上練馬村の窮状を救うために助郷負担の軽減嘆願書が提出されたとの文書が残っているという内容です。その中には、当時の農民の窮状が切々と綴られており、村民のためを思っての行動であることが如実にうかがえます。しかし、村役人にとっては極めて不都合な行動をあえて実行したことになりますので、彼の人柄が大いに偲ばれる内容と言えるでしょう。

前にも触れたことがありますが、「南部の赤門」と呼ばれている相原家薬医門の残っている、あの屋敷の当主です。ただ、代々が「源左衛門」を名乗っているので、何代目なのかで区別しなくてはいけません。厄介です。

最後に、裏手の墓地に行く通路脇に２体の石仏がありますので、触れておきます。向かって左が、舟型の如意輪観音像です、延宝２年（１６７４年）８月の年紀が薄く見えますが、不思議なことにその脇にもう１つ、宝暦（１７５１～１７６４年）の年号も見えます。どういうことなのでしょうか。こういう謎めいた記述に出会うと想像力を掻き立てられます。

向かって右は庚申塚です。正面に「青面金剛尊」の文字が彫られ、造立年は安永９年（１７８０年）２月となっています。足元には三猿が彫られているとは言え、残念ながら青面金剛像が彫られているわけではないので少々魅力には乏しい気がします。

この庚申塚については、練馬区教育委員会発行の「祖先の足跡　練馬の庚申塔」という古い著作物で、調べてみたところ、もともとこの地にあったのではなく、田柄３－１３との表記を見付けました。恐らく、この墓地のすぐ北隣にあるマンションを建設するに当たって、移設したものと思われます。無下に廃棄されずにこうして生き残っていることをとても愛おしく思います。

（終）

編集後記

さあ、立ち上がって行こう。
夜も昼もわかちなく
湖の水がひたひたと
岸辺を打つ音が聞こえるのだから。

……　W･B･イェイツ

この詩の書き出し「さあ、立ち上がって行こう、イニスフリーへ。」を知らなければ、意味が分からないかもしれません。イニスフリー島は、アイルランド北部にある湖ロッチ・ガイルに浮かぶ小島です。アイルランド出身のジョン・フォード監督作品に「静かなる男」がありますが、この物語の舞台もイニスフリーですから、多分にオマージュとしての位置付けをしていると思われます。

さて、イェイツも少年時代にこの島をたびたび訪れていたそうで、この島の静かな自然がその後の心象風景として深く刻まれたようです。ということから、この詩は幼少時への郷愁を歌ったものだと言えそうです。そのため、スピルバーグの映画「Ａ．Ｉ．」に、この詩が朗読される場面が出てきます。この映画、前半はスリリングで面白いのですが、後半が観念的でつまらない映画でした。

ところで、誰でも幼少時代の思い出の中には、大切な１コマが眠っているように思います。

我々はいつも恋人を持っている。彼女の名前はノスタルジーだ。（ヘミングウェイ）

こんな素敵な言葉もあります。昔の思い出に浸ることは女々しいとか意味がないとかカッコ悪いと揶揄されることが多いのですが、私たちにはノスタルジーが必要です。ノスタルジーは私たちに生きる活力を与えてくれるからです。しかも、幸福感をもたらす効果もあると言われています。

・人生の意味を感じる…ノスタルジーを感じるとき、貴重な人生経験を思い出すことが多く、そこに、人生の目的や意義をたくさん見出しているものです。

・自己肯定感を高めてくれる…思い出の中で蘇るエピソードは自分中心になっている場合が多いので、自己肯定感を高めてくれるのに役立ちます。

・孤独ではないことを認識させる…特に、親密な人との思い出を蘇らせ、自分が孤独でないことを認識し、生きる意味を見出す手助けとなります。

・ポジティブな気分を高めてくれる…思い出は、ポジティブに脚色されていることが多く、前向きになることが分かっています。

こうして改めて触れるまでもなく、落ち込んでいる時や不安を感じた時、懐かしのあの曲を聴く、思い出の場所に行く、友人と昔話に華を咲かせる、そんな行動を無意識に選択しているものです。その結果、私たちの心の負担が軽くなって、救われるということは、ことの大小はともかく結構日常的なことなのではないかと思います。

冒頭の言葉に戻りますと、大抵の人にとっても「岸辺を打つ水の音」に懐かしさを覚えるのではないかと想像します。私の場合は、郷里を流れる芦田川の風景や、そこでの思い出が数多く思い出されます。できることならもう一度ゆっくり土手に座って時を過ごしたいものだと思うことがあります。と同時に、一体いつになったらそれが叶うのだろうとの思いも拭えません。

何とか銀杏通信の担当も折り返し地点に辿り着きました。この正月は、思いっきりノスタルジーに浸ることとします。皆様も良いお年をお迎えください。

（タコヤキマン）